

地塩

No.425

2022. 3. 27

目次

発行日 2022. 3. 27
 創刊 1926. 9. 10
 編集 蕃山町教会執事会
 発行人
 印刷人 山陽印刷(株)
 発行所
 岡山市北区蕃山町2-15
 日本基督教団蕃山町教会
 TEL = (086)224-1322
 FAX = (086)224-1329
 三井住友銀行岡山支店
 口座 普通 0962358

礼拝説教

2022. 2. 13

「この世界を見よ」

ヨブ記三九章一〜三〇節

伝道師 高根 祐子

人が神さまを信じるのは、御利益がほしいからではないのか、という神さまとサタンの会話が発端となって、ヨブの災難は始まりました。神さまも認めるほどの義人だった彼は、家族を失い、財産を失い、健康を失いました。彼を苦しめることをサタンが願い、神さまが許可した。ヨブはそれを知りません。彼を慰めようとして、遠くから来てくれた三人の友人たちは、彼の災難は罪の報いに違いないと思ひ込んで、因果応報論を使って彼をやりこめようと躍起になりました。そのあと四人目の人物エリフが乱入し、言いたい放題のことを言って、消えてしまいました。そして、ついに嵐の中から、神さまがヨブに語りかけられました。自分がこれほどの苦難に遭うのは、神さまの正しさが失われているのではないか、それを神さまに問いたい、というのがヨブの望みでした。だから彼は、友人たちの言うような罪を自分は犯していない、と主張し、神さまの前でな

りふり構わず、執拗に叫び続けました。そんなヨブに対して、神さまがついに沈黙を破って、お応えになります。その応え方はさわめて独特です。ヨブが延々と続けてきた主張、切実な問いに、神さまは真正面からお答えになるので、

はありません。ヨブの質問に対する直接の回答は与えられません。あなたの苦難にはこういう意味があった、と慰め、労いの言葉をかけてくださるのではないのです。あるいは、サタンが彼を試していた、という裏話が、ヨブに明かされることはありません。そういうわかりやすい答えは返つてきません。それどころか、ヨブに対して、神さまが問いを発せられるのです。問うのは神さまであって、人間であるヨブではないからです。

神さまの語るの、万物の創造についてです。ヨブは友人たちとの対話の第一声で、自分の生まれなかったことについて、自分が生まれなかったことのために、自分が行われなかったことにならばいいのではないか、とヨブは言いました。創造の時に神さまに屈服させられた太古の怪物たちが、眠りから目覚めて力を取り戻し、神さまの業を呪ってほしい。それが無理ならば、陰府での眠りに安らぎを得たい。ヨブはそんなことを口にしました。たかが人間ひとり、生まれてしまったことを取り消すのに、天地創造の御業をなかつたことにする、というのはなんと大袈裟な、牛刀をもって鶏を割くに等しく見えます。でもヨブは、大真面目

にそんなことを言っただけです。神さまはこのヨブの大袈裟な言葉に感じるかのように、御自身の創造について語り始められます。はじめに神さまがすべてをお創りになったその時、当然ですが、人間はまだ創られてはいません。その御業を目撃した人間は、もちろん誰一人いません。そして、世界についての人間の知識にも認識にも、限界があります。隅々まで知り尽くすことは、人間にはできないのです。それを承知で、神さまは、大地と海について、光や闇について、さまざまな気候について、天の法則について語り始められます。御自分の御計画に基づいて、あらゆるものを創られ、それを今に至るまで保護し、維持しておられる、その当事者にしか語れない仕方です、しかも一方的に語られます。それについて何を知っているのか、と神さまはヨブに問われます。神さまの言葉は疑問文のかたちでずっと続きます。

三十八章の終わりから、神さまは生き物の世界に目を向けられます。実にいろいろな動物や鳥が地上に生きています。それらはみんな、神さまがお創りになったものです。神さまがよしとしてくださったものです。家畜も、野生の生き物も、固有の性質や特徴をもっています。神さまは一つひとつ名を挙げながら、それらの生き物についてヨブが何を知っているのか、と畳みかけられます。神さまは、御自分の創られたさまざま生き物を喜び、慈しまれます。町の住人だったヨブには、ごく一般的な知識以上のことはわから

なかつたことでしょう。生き物たちは、動物の世界に存在しています。それぞれ自由に生き、躍動しています。生きていくために、ほかの動物を食べたりもする。それは動物の世界の秩序であって、人間の道徳でどうこう言うことはできません。人間の手本にも、教訓にもできません。ヨブは自分の苦況について、社会から弾き出され、ジャッカルや駝鳥の仲間になってしまった、と嘆きました。人間は人間の世界に生き、そのルールに従うものですから、そこから出たら人間として、人間らしく生きていくことはできません。

神さまにとつては、これらの生き物はいずれも、御自身でお創りになり、慈しんで守ってこられた、大事な被造物です。それらがどうやってこどもを産み、どんなところに住んで、何を食べるのか。なぜそうなのか。神さまはみんな知っておられます。それらは、神さまがお与えになったからです。これらの生き物が生きて、死に、子孫を増やしていく。すべて神さまの御手の中に、祝福のうちにあります。創られたものは、「極めて良かった」。神さまは何もかも喜んでおられ、愛しておられるのです。神さまは被造物全体を肯定されました。ヨブが否定したかった創造の御業を、神さまは力強く、肯定されます。

人間はこの世界の管理を、神さまから委ねられました。その中には、ほかの生き物たちも生きています。自分の知恵に頼り、自分の利益のために、地上にあるさまざまなもの、自分たちのために用います。そうして人間は社

会を造り、国を造り、文明を発達させてきました。世界のことを知りたいと思ひ、科学や哲学を發展させました。自然界の謎を少しずつ解き明かしてき

ました。いまでは、遠い宇宙のことや、地球の奥底のこと、人間やほかの生き物の身体の仕組み、病気がなぜ起こるか、どう治すか、などということについての知識を、わたしたちはある程度まで貯ええました。人間の活動が、地球全体の気候に悪影響を及ぼすようなことさえ起こっています。忘れがちなことですが、この世界にあるものはもちろん、何もかも神さまがお創りになつたものであり、神さまのものです。

わたしたちは主人であるかのように、横暴に振舞いますが、実は管理人を任されているだけに過ぎません。人間はその一員として、世界の中に生きている、そこで生かされているのです。解き明かせない謎が、たくさんあります。知識に限界があることにおいて、古代の人々と現代のわたしたちは、たいてい変わるところがありません。そして、人間は神さまを知りたいと思ひますが、神さまが御自身をあらわそうとなさなければ、わたしたちは神さまを知ることができません。

ようやく沈黙を破られた神さまは、いったいなぜ、創造についての問いをヨブに立て続けにぶつけられるのでしょうか。ヨブには答えようもない、知りようもないことばかりです。何もわからぬにもかかわらず、神さまに對して大口を叩いてきたヨブに、その愚かさを悟らせ、ちっぽけな人間ごときが生意気なことを言う資格はないの

だから黙るがいい、ということなのでしょうか。そうではありません。ヨブが抗議したこと自体は、神さまはお咎めにならないのです。ヨブと神さまの間の信頼関係は、壊れてはいませんが、自然の世界は、人間のために造られていてはなりません。ヨブひとりの都合で、創造は取り消されたりするようなものではありません。ヨブの考える義しさはあくまでも人間の義しさで、それで神さまをはかろうとしていたのです。神さまの義しさは、人間の義しさとは違う、もっと大きい

ものです。人間は被造物の一つであり、世界の一部ですが、世界は人間のために創られているわけではないからです。人間の小さな判断基準で、神さまを判断することなどできないからです。自分の苦難にとらわれて近視眼的になり、人間中心の見方しかできなくなつていたヨブを、神さまは連れ出され、もつと広い所に立たせてくださいました。ヨブの苦しみは、神さまが沈黙しておられること、神さまから見捨てられ、自分の人生が無意味になつたと感じることからきていました。いま神さまは彼に伝えてくださいました。彼の期待した答えではありませんでしたが、彼ひとりに、思いがけない仕方、真剣に伝えてくださった。一被造物であり、塵から創られ塵に還る人間ヨブに、神さまが正面から向き合ってくださいました。神さまはヨブを無視してはおられず、その正義は失われてはおらず、神さまの御支配は被造物の世界に確かに広がっている。そこには不条理も不運も存在するけれども、すべてのもの

は神さまの御配慮にたく支えられている。まさにこの御方こそ、天地万物を創られた方であり、その御方は御自分の創られたひとりの人間に、人格的に向き合ってくださいます。そのような御方を、わたしたちは主と呼ぶことが許されているのです。